開催地名：愛媛県伊予市	
開催日時	令和２年 11 月 25 日（水）　　10：00 ～ 11：30
開催場所	伊予市役所
語り部	松本　拓　　（福島県いわき市）
参加者	伊予市職員　約 40 名
開催経緯	当市では、大規模災害等での避難所開設運営経験がほとんどなく、開設運営にあたる職員についても、なかなか運営等に対する意識付ができないことが課題となっている。そこで、避難所運営経験のある語り部からお話を伺うこととする。
内容	（１）はじめに いわき市は、福島県の東南端に立地し、茨城県と境を接し、広大な面積を持つ街である。太平洋に面しているため寒暖の差が比較的少なく、温暖な気候に恵まれた地域である。震災前の人口は約 34 万人、震災後 33 万人まで減少したが、現在は 33 万６千人まで回復している。私は平成 16 年にいわき市役所に入庁し、東日本大震災発災時に避難所の運営を行った。本日は避難所運営について、そのイメージをつかんでいただけるような話をしたい。 （２）　いわき市内の被害状況 東日本大震災によるいわき市の状況は、震度６弱、津波最大高 8.57 メートル、犠牲者 467 名であった。津波は太平洋より市内の河川を遡上して被害を拡大させ、海岸線は 60 キロメートルに渡り全て壊滅、そして、原子力発電所も壊滅し、震災発生当日の 19 時 03 分には第１原発に原子力緊急事態宣言が、翌日３月 12 日にも第２原発に同じ宣言がそれぞれ出され、人の行き来と物資の市外からの流入が強制遮断となった。３月 18 日には、事前に服用することで甲状腺被ばくを低減できるという「安定ヨウ素剤」が市から配布され、我々はもうダメなのかもしれないという気持ちにさせられた。 このような凄惨な状況の中、私は市内指定場所の１つである小名浜第２中学校へ派遣され、避難者約 800 名の対応に、たった一人で当たることとなった。初めて避難所に入った時の光景は忘れられない。それは子どもの頃に写真や映像で見た、広島や長崎の原爆投下後の市内の様子と重なった。その時の実際の状況と、この震災から学んだことを説明する。 （３）避難所の実際の状況 メディアで東日本大震災の状況は沢山取り上げられたが、実際の現場における職員たちの苦悩や、どんな問題があったのかはほとんど取り上げられなかった。特に苦労したのは避難者への対応で、細かいところまであらゆる対応が求められた。

	避難生活が長期化すると、「寒さを何とかしろ」といったストレスのはけ口としての文句であったり、配給されるおにぎりを巡っての避難者同士の醜い争い、毎回同じような食料の配給に対する不平不満等、本当に人間のいやな部分を多く見せつけられた。更に、人間というのは極限状態、窮地に立たされると、自分のことしか考えられなくなるということをまざまざと感じた。他の避難所でも同じような状況で、職員の中には精神的に参ってしまい、最終的には避難所へ出てこれなくなってしまう者もいた。 そのような中でも、トイレの問題に関しては想定外の協力者が現れた。それは中学生達で、何も言わずに率先して、プールの水をトイレまで運んでくれた。人の役に立っていることがうれしかったようで、嫌々やるということではなく、本当に一生懸命運んでくれた。この中学生の行動からは、人の優しさを感じることができた。 （4）この震災から学んだこと まず、この震災を通して気づいたことは、一人ではできないことも、力を合わせれば乗り越えられるということだ。本当にこれに尽きると思う。何日間にも及ぶ避難所の運営を、何とかこなすことができたのは、学校の先生方や生徒たちの協力であったり、ボランティア、県外、市外からの方々の協力、皆さんの協力があって、なんとか乗り越えられたことと、ひしひしと感じている。やはり、やってもらうという受け身の姿勢ではなく、自ら動くという自発の姿勢。争うのではなく、協力することの大切さ。一人のためではなく、みんなのためにという気持ち。そこに本当の絆と言われるものがあるのではないかと思う。 もう一つ大切なことは、家族の理解である。私たちには、かけがえのない家族がいる。そして、市職員も被災者である。市職員である以上、災害対応に勤しむことが求められる。そのため、家族間の信頼と理解、これは非常に大切である。災害はいつ起きるか分からない。大切なことは、災害時に、自分がどのような立場で何をすべきか、平時からイメージ、準備をしておき、家族間で話し合っておくことが必要である。
開催地より	講演を聞き、東日本大震災の際の避難所で起こっていたことを具体的に理解することができた。市として、災害に備えてできることについて確認するとともに、避難所の運営についても参考にしていきたい。